



大学受験に対応する英語教育だけでなく、 ツールとしての英語力も身につける カリキュラムを整備

毎年、難関国公立大に数多くの合格者を輩出している海城中学校・高等学校。グローバル化社会に向けた英語教育のさらなる充実をめざして、カリキュラムを改革中だ。その内容と、今後の目標について、英語科主任の渡邊聡大先生と副主任の小野木俊幸先生に話を聞いた。

—御校では、1991年に創立100周年を迎え、その翌年から約20年かけて学校改革を行っています。昨年からは、学校改革の第三段階に入ったようですが、どんな改革を行っているのですか。

渡邊 昨年度から帰国生入試を導入し、30名の帰国生の受け入れを開始しました。そして、今春からグローバル教育部を発足させました。これまで帰国生が学校生活に馴染めるように配慮していましたが、グローバル教育部を立ち上げることで、帰国生だけを支援するのではなく、一般生徒の英語学習へのモチベーションを上げる取組みや海外の大学へ進学する生徒へのサポートなど、幅広い支援ができるようになりました。

—帰国生の受け入れには、どんな意図があるのですか。

渡邊 英語の必要性は高まっていますが、学校という建物の



英語科主任 渡邊聡大

英語科副主任 小野木俊幸

中では、英語をツールだと感じる機会はあまりありません。しかし、帰国生がネイティブ教員と話しているのを目の当たりにするだけでも、英語がちゃんと使えるツールだと示すことができます。また、帰国生と接する中で、きっかけさえあれば自分もこうなれる、と英語に対する目標を持てるようになります。今後は、行事などを通して帰国生が活躍できる機会や、生きた英語に触れる機会を一般生徒に提供するなど、双方に適した教育システムを整備していきたいと考えています。

小野木 現在の帰国生入試は、主に海外の日本人学校に通

っていた生徒を対象とする「4科、面接」か、現地校やインターナショナルスクール出身者を対象とする「算数、総合問題、面接」の2つの選考方法で実施しています。しかし、現地校出身者は、英語で授業を受けてきていますし、外国で英語を身につける中で、多くの努力をしています。その点を評価し、2014年度から英語科目での受験を可能にします。ただ、英語の入試といっても英語の知識を問うのではなく、英語を使って考えたり、表現する形式の問題を出題する予定です。

—英語のカリキュラム変更もお考えのようですね。

渡邊 従来よりネイティブ教員による英会話などの授業は行っていたのですが、中2の英会話と高3のライティングを完全チームティーチングに変更しました。

—どんな効果があるのでしょうか。

小野木 ネイティブの英語に触れる機会は大切です。しかし、中学1・2年の早い段階では、よく分からないまま授業が過ぎてしまうこともあります。例えば、英語上の誤りをしたときに、ネイティブの教員だけだと、単に訂正するだけで済んでしまうかもしれません。しかし、われわれ日本人教員は努力して英語を身につけてきたので、どうしてそういう誤解が生じたのか、どのようにすれば解決するか、という道筋を立てて指導できます。日本人教員とネイティブ教員の両方の長所をうまくブレンドできる点が、チームティーチングの大きな魅力です。

渡邊 日本人教員とネイティブ教員のやり取りを生徒に見せることで、習っている英語がちゃんと機能するツールだと示すこともできます。また、高校3年のライティングの授業でも、日本人とネイティブの2教員によるチームティーチングを取り入れています。高校3年では、ツールとしての実践的な英語教育から受験に対応する英語教育へとうまくスライドさせていかなければなりませんから、教員としての指導力が問われていると感じます。ただ、近年は大学入試問題にも変化が見られます。「日本語を英語にしなさい」というような問題から、「あなたの考えを英語で書きなさい」とか「英語で表現しなさい」というような問題を出題する大学が増えています。こうした流れは、本校の英語教育のビジョンと一致している点が多いですから、より効率的・効果的な授業を提供できると思います。

小野木 ネイティブ教員に直接質問に来る生徒も多くなっています。質問はすべて英語でしなければなりませんから、その体験は海外に目を向けるよいきっかけにもなります。英語が大学入試科目の一つというだけでなく、将来的にも使えるツールだと認識させることは難しいのですが、そういう英語観を養ってほしいと思います。

—海外の体験学習などについては、どうお考えですか。

渡邊 現在、語学研修を中学3年と高校1年で実施しています。各30名ずつ募集していますが、いつも希望者が大幅に上回る状況です。こうした機会をより広げていくために、留学などの制度の改革にも着手しています。

小野木 1年間の長期留学に関しては、柔軟な制度を採用しています。留学後、海外で取得した単位を認定して進級することもできますし、海城でのカリキュラムを積み重ねて進級したい生徒は、もう一年同じ学年で学ぶこともできます。どちらにしても、目的意識を持って留学や語学研修に臨んでほしいと思います。



—グローバル社会を迎えた今、どのような進学指導をしているのですか。

小野木 海外の大学に進学を希望する生徒も増えています。帰国生入試の導入によって、さらに増えていくのではないのでしょうか。今後はグローバル教育部で海外の大学を視野に入れた指導体制を確立していきます。

渡邊 また、グローバル社会を迎えて、普遍的な知としてのリベラルアーツの重要性も高まっています。グローバル教育部では、優れたリベラルアーツのプログラムを取り入れているIBディプロマの教育制度を調査・研究することで、教育内容をより充実させていきたいと考えています。

—最後に、受験生に向けてメッセージをお願いします。

渡邊 英語は、国や文化の違う人々とつながるツールです。中学校に入学すると、英語という新しい教科が増えると考えている受験生も多いでしょうが、教科が増えるというよりは、新しい技能を身につけるための時間ができると捉えてほしいと思います。

小野木 進学校の英語は難しいというイメージがあるかもしれませんが、楽しく学べるように教材や内容を工夫しています。国際化社会だから英語を学ばなければならないという気持ちよりは、英語は楽しいから使ってみようという気持ちを大切にしていますので、期待して入学してほしいと思います。

海城中学校 海城高等学校

〒169-0072 東京都新宿区大久保3-6-1 TEL 03-3209-5880 FAX 03-3209-6990

<http://www.kaijo.ed.jp>